

交通の発達による観光業への影響

—清川村でのフィールドワークから—

K.M.

1. 注目を浴びている村の活性化

『村』と言われたら一体何をイメージするだろうか。私はこれまで村とは縁がなかったため、村は畑ばかりで周囲にお店もあまりなく、どこか遠い存在で孤立しているような印象を持っていた。そんなイメージを払拭するかのように、近年では「村おこし」などと言ったいわゆる地域活性化に向けた取り組みが注目を浴びつつある。具体的には、村の自然を売りとしたエコツーリズム¹を中心とした体験型の観光による村おこしが行われている。村の知名度を上げつつ、収益を得ているのだ。

観光業の発達と交通網の発達には密接な関係があると言われており、日比野の研究²では、2007年から始まる団塊の世代の定年退職等により、さらにそれが増加すると予測されており、アクティブシニアが今後どこにどの交通機関で旅行するのかが現在着目されている、という見解がある。その他にも西井の研究³によると、観光立国推進基本法制定(2006)により国が主導で展開される観光振興は国土形成論の新機軸の1つとして位置図付けられており、魅力的で持続可能な観光圏形成に向けた整備・計画手法の確立が急務な課題であるという。

そこで本研究では、村の活性化に重要な役割を担っている観光業に対して交通がもたらす影響について考察していく。

2. 調査する村について

本調査では、神奈川県愛甲郡清川村（以下、清川村）を取り上げる。清川村は神奈川県中央に位置し、首都50km圏内にある。神奈川県唯一の村であり、全体が丹沢大山国定公園と県立丹沢大山自然公園に指定され、豊かな自然に恵まれている。その大部分が急峻な山間地であり、居住できる地域は限られている。ほぼ三角形の形状で、総面積71.2

¹ 観光省のホームページには、「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた」と定義されている。

<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/about/index.html> (2015年6月29日閲覧)

² 観光を目的とした都市間交通の特性に関する基礎的研究

https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalip1984/24/0/24_0_389/_pdf (2015年6月29日閲覧)

³ 西井和夫他 地方部の道路整備と観光圏形成に関する基礎的研究

http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/200906_no39/pdf/98.pdf (2015年6月28日閲覧)

9 km²の89%は、経ヶ岳、仏果山、三峰山などが連なる山林で占められている。住民基本台帳によると、2015年3月現在、人口3071人で、そのうち男性1586人、女性1485人であり、地域の高齢化は着実に進展しているという。⁴

清川村には村内に鉄道が通っておらず、そのため清川村へのアクセスは、隣町の本厚木駅からバスで40分ほどかかる。車の場合、中央自動車道・東名高速道路最寄りICから約40分だ。調査を進めていくうちに交通の便は決して良いとは言えない清川村の観光客数は増加している、という興味深いデータが得られた。(図1)

3. 清川村の交通と観光客数

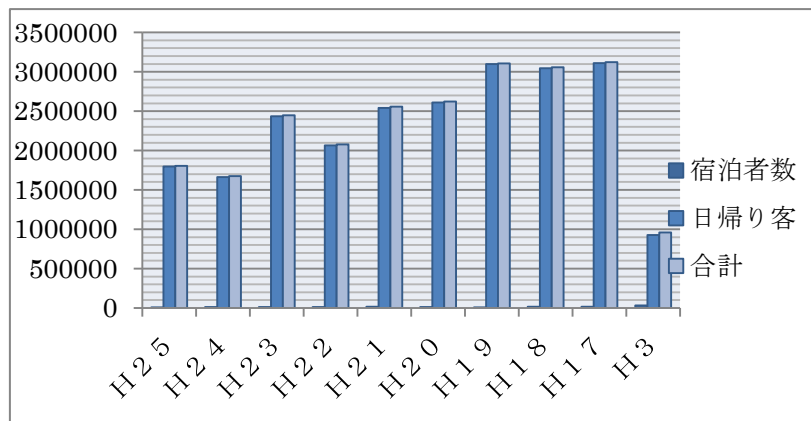
以下は、清川村の産業観光課から頂いた資料を基に作成した清川村に行くまでの唯一の交通手段の交通バスの運行本数をまとめたもの(図1)と清川村が発表している観光入込客の状況の一部抜粋(図2)である。

図1 清川村へのアクセス可能な交通バスの運行本数 (単位：本)

路線	区分	運行本数					
		平日		土曜		日曜	
		往	復	往	復	往	復
本厚木駅～宮ヶ瀬		15	15	15	16	15	16
本厚木駅～上煤ヶ谷		9	7	4	3	4	3

(資料：神奈川中央交通株)⁵

図2 観光入込客の状況 (単位：人)



(資料：清川村ホームページ)

図1から分かるように、清川村への唯一の交通アクセスであるバスの本数は非常に少な

⁴ 清川村ホームページ

<http://www.town.kiyokawa.kanagawa.jp/index.html> (2015年6月7日閲覧)

⁵ 神奈川中央交通株

<http://www.kanachu.co.jp/> (2015年6月7日閲覧)

く、実際に時刻表を確認したところ1時間に1本で、決して交通の便が良いとは言い難い。道路も2車線で間隔もそこまで広くなく、1本裏道に行くと人と車がすれ違うのがやっとのところもあった。これらの道に大型の観光バスが通ることは考え難い。

だが、図2から分かるように観光客の数は伸びており、特に日帰り客の数値は平成3年と平成25年を比較すると約2倍である。先行研究にもある観光と交通の因果関係を覆すような事態である。

清川村には『清流の館』という2階建ての建物があり、1階には清川村オリジナルの『ゆずわいん』や茶葉などの観光向けの商品のみならず、地元農家の方々が栽培した野菜や日用生活雑貨も売られていた。休日はこの野菜を求め、村外から来た人も含めお店の外まで長蛇の列ができるとのことだった。2階には誰もが使える休憩室があり、そこには観光案内のパンフレットや清川村での行事の写真が展示されていた。清流の館は村役場の向かいにあり、村民が集まりやすく、実際に訪問した際に観光客向けのみならず、村のコミュニティ形成に一役買っているような印象を持った。

館の方が非常に良心的な方で、突然ではあったが我々の調査に協力していただくことができた。まず、この館で日用品も販売している背景として、数年前にスーパーマーケットが潰れてしまったため村内でも日用品を購入できるように、という配慮であると伺った。比較的規模の大きい厚木市と隣接しているため、車を用いれば買い物などで苦勞することはないそうだが、簡単に車を出すことのできない高齢者にとっては村内で日用品を購入できることは重要であるという。上記でも述べたようにバスの本数も少ないため、交通機関を利用し村外に赴くのは容易ではないからだ。また、館の方にバスの本数について妥当か伺ったところ、本数が少なすぎると感じているとのことだった。以上のことから、当初は『観光者向けの交通』という側面しか考慮していなかったが、このことに留まらず村の主役となる村民を第一に考えた村作りが最優先であるということが垣間見られた。

私は当初、村内の交通量を増やせない背景に村全体が国定公園となっているからではないかと予測していた。観光のための交通・住民の生活のための交通・そして自身の予測を軸に村役場の方に尋ねたところ、役場はバスの増便（早朝便などの通勤時間を主としたもの）といった村民の生活の足としてバス会社と交渉を試みる姿勢はあるようだが、村の特殊な環境から現段階では困難であるという。

4. 清川村における観光業

清川村の観光地として宮ヶ瀬ダムが最も有名である。ダム周辺にはピクニック広場や展望台、工芸工房などがある。産業観光課曰く、集客の95%がこの宮ヶ瀬ダムで得ているとのことだった。また、清川村は観光において『村』を売りにしているというよりは『宮ヶ瀬』を押し出しているようだ。

現在の清川村における観光業の主体は行政というより限られた村民、ダム近辺のことに關していうと公益財団法人宮ヶ瀬ダム周辺振興財団で、この振興団体は年間約120もの

イベントを企画・実行している。行政レベルで観光に関与すればより観光客が増えるだろう。

村全体では四季折々のイベントを開催しており、春は桜まつり、夏はカヌー教室や花火大会、秋はマラソン大会、そして冬は大規模なイルミネーションが用意されている。そして、ハイキングや山登りといった自然と触れ合うことを目的とした観光客も多くいる。清流の館で清川村に観光を目的として来られていた方に清川村を選んだ理由を伺ったところ、宮ヶ瀬ダムを目的とし、また、車でのアクセスが容易で自然もたくさんあるからだとのことだった。

このような需要があるのだが、観光業をより発展させたいという村役場の方々の思いとは反面、現状は厳しいようだ。まず、職員の少なさである。村であるがゆえに職員の数が限られており、現時点でも村役場は8名という小規模で観光業・商業・産業・金融業などの業務を行う必要があり、1人で何役もこなさなければならないと訴えていた。お話を伺った産業観光課の方は、行政も行いつつ、近場の温泉の経営にも携わっているとのことだった。

観光業の発達にマスメディアの存在が大きく関与するということは周知のことだろう。清川村もマスメディアの影響を受けた村の1つであった。ここでいくつか事例を挙げて説明する。例えば、宮ヶ瀬のイルミネーションのイベントは今年で30年目で、冬場のイルミネーションの先駆的な存在であったという。首都圏からも車だと比較的移動が容易な位置にあるためマスメディアが毎年取り上げたところ視聴者が物珍しさに大量に押し寄せたという。また、かつて宮ヶ瀬のダムをイメージして作られた『ダムカレー』がメディアに取り上げられ、これを目当てに予想をはるかに上回る観光客が押し寄せたそう。通常数十人分しか用意していないごく一般的な飲食店に何百人も来店したことで需要と供給のバランスが崩れ、観光客からのクレームが発生したそう。清川村の道路は基本的に2車線で決して広くはない。そこに大量の車が現れたことにより交通渋滞を招き、地域住民からも村役場に対して意見が寄せられたとのことだった。現在でも清川村は様々な映画やドラマ、バラエティー番組のロケーション地として利用されているのだが、村側はかつての経験から敢えて大々的に告知をしないとのことであった。観光業を発達させたいという思いと現状とにギャップがあるということが今回の調査で見えた。

5. 清川村の今後の展望

まず、清川村全体の展望を検討する。巷では『地方創生』が謳われており、清川村も対象となる。産業観光課の方に実際この政策は効果的なのか尋ねたところ、全国で同じプロジェクトなので清川村にフィットするかどうか現段階では検討がつかないとのことだった。

例えば政策内容の1つに『ふるさと旅行券』というものがある。観光客はこの旅行券の額面より安く購入でき、観光促進に繋げるというものなのだが、村側からは国がダイレクトにお金を落としてくれるのはありがたいが、清川村が存在する神奈川県には横浜・箱根・湘南といった強力な観光地があるので清川村にいったいどれだけ回ってくるかが不安視されていた。地域雇用についてだが、清川村で働くというよりはベットタウン化してこの状況を改善するのは困難なように思われる。交通の面から考慮すると、村役場としてはこれを機に村民の生活の支援に重きを置く方向で進めていき、生活の足となる交通バスの増便や道路整備を行えるのが理想であるという。

次に、観光業は交通網の整備とも深く関連していることが再確認できた。また、財源としてダムからの固定資産税を確保しつつ、人手不足も大きく関わっていることから村役場の方々のみならず振興財団などの団体単位での介入・分業化が見込まれる。

最後に村の発展のために観光を発達させるには以下の3点が鍵となるのではないかと導き出した。1点目は受け入れる従業員の確保である。メディアを利用してせつかく観光客が集まったとしてもそれに対応できず満足度を下げてしまえば意味がない。よって、まずは兼業だとしても人材の確保が必須であると考え。2点目は地域住民の理解を得ることだ。観光客の増加によって元からいた人たちの生活体制に変化をもたらす場合がある。村民と一体となって村おこしができるかどうかを考慮しなければならない。そして3点目は交通整備である。清川村は幸いにも車でのアクセスは比較的望ましいためイベントに足を運ぶ観光客が多いが、自動車を利用する人向けには道路の補正や車線数の増加、そうではない人を対象とするには鉄道や路面バスを充実させることが望ましいだろう。ここで最も主張したいことは、ただやみくもに整備するのではなく、観光客の動線を意識した交通整備だ。例えば大型バスを利用した観光業を視野に入れるのであれば、道幅があり、曲がりくねった道より真っ直ぐとした道のほうが好まれるだろう。これらのどれか1つでも欠如してしまうと長期的な観光業を成立させることは困難であると推測する。それぞれの村にあった観光業の発達を通し、村の知名度が上がり、財源や人材の確保が行いやすくなり地域活性化につながることを願う。